



JSQC ニュース

No.247

発行 社団法人 日本品質管理学会

東京都杉並区高円寺南1-2-1 (財)日本科学技術連盟東高円寺ビル内

電話:03(5378)1506 FAX:03(5378)1507

ホームページ:www.jsqc.org/

CONTENTS

- 1-トピックス JIS制度の新しい方向
- 2-私の提言「QC教育」再考
- 2-ルポルタージュ 第291回事業所見学会ルポ
- 3-ルポルタージュ 第292回事業所見学会ルポ / 第11回YSSルポ
- 4-新規研究会メンバー募集 / 入会者紹介 / 行事案内 / 会費請求

JIS制度の新しい方向

学会標準化委員会 矢野 友三郎 (経済産業省)

日本工業規格、いわゆるJIS規格と規格に基づくJISマーク表示制度等は、昭和24年に工業標準化法が制定されて以来、50年にわたり我が国の工業発展に貢献してきた。

この間政府は、3次にわたり工業標準化法の実質的な制度改正を行い、内外の環境変化に柔軟に対応してきた。しかしながら、近年の大きな環境変化により、JIS制度においても更なる見直しが必要となってきた。

産業競争力強化のツールとしての標準の役割の増大、
消費者ニーズが多様化する中で、
情報伝達ツールとしての規格への期待の増大、
行政改革の一環として、これまでの指定・認定制度から、事業者の自己責任をベースとした第三者機関（登録機関）による実施への移行

以上のような状況を踏まえ、平成14年6月、日本工業標準調査会の下に「新時代における規格・認証制度のあり方検討特別委員会」を設置し、新たな時代における規格・認証制度の課題を整理するとともに、政策の方向について議論を重ねてきた。平成15年6月、同特別委員会は、規格及び

認証制度に関し、今後の在り方に関する基本的な考え方を次のように取りまとめた。政府は、同特別委員会の検討結果を踏まえ、現在、法律改正を含め具体的な取り組みに着手している。

規格制度

規格については、我が国産業の国際競争力強化のツールとしての活用、多様化する社会ニーズへの対応等を進めることが必要との認識に立ち、

- ①国際規格化のための対応体制の整備
ISO / IECへの日本からの提案に、「フォーラム規格」を活用することとし、簡素化した手続きによる国際提案制度を設ける。これにより、我が国発の新製品・新技術の市場の創出を一層効果的に図っていくことができる。
- ②規格作成の迅速化・効率化

現在、550を超えるJIS規格の原案作成団体があるが、一定の要件を備えた団体をCSB（有資格標準化団体）とし、迅速化・効率化した手続きによりJIS規格を制定する。

③強制法規への引用促進等

欧米と同様に強制法規へのJIS規格の引用促進を目指すため、技術基準等に応じて引用されやすいJIS規格、規格番号体系を整備する。

認証制度

認証制度については、JIS規格を活用する適合性評価制度の活用、世界ネットワークへの統合、認証ビジネスの新たな展開等の観点から、①ユーザの多様なニーズに対応し、②国際整合化の確保により重複検査の排除（ワンストップテストの実現）を可能とするような、新JISマーク制度（新JNLA制度を含む）を構築する。

具体的には、従来のJISマーク制度等では、国又は国の代行機関等（指定認定機関、指定検査機関等）が工場の審査・検査を行っていたが、新制度では、これらの業務を国際的な基準等に基づき国に登録された登録認証機関が行う。これにより、国際基準とより整合化され、かつ、登録機関間の認証・試験結果の国際的な受入れ（MRA）促進が期待できる。

また、国の関与を必要最低限とするとの観点から、現行の指定商品制度は廃止される予定である。

新しい制度の根拠となる工業標準化法の改正は来年以降に予定されている。なお、法改正をとまなわない、規格制度は早ければ今秋から導入が始まる。

私の提言

「QC教育」再考

中部品質管理協会 杉山 哲朗



(株)デンソーから出向して、現在の職場で中部地域のQCの教育・普及の仕事に携わって3年になる。残念なことに、1980年

代のTQCブームといわれた時と比較すると、QC教育の受講者数は約半分である。これは、QC基盤の弱体化の一要因であるとも思われる。

教育内容の陳腐化もあり、大いに改善しなければならないところもあるが、QCの基本となる手法は、もっと多くの技術者、管理・監督者に勉強してもらいたい。

学校教育も「ゆとり教育」という

名をかりた学力低下が著しく、人が財産であるという日本の産業の将来が心配である。ILOの調査によると、日本人の1年間の労働時間は、約1840時間、韓国人は約2450時間、アメリカ人は約1920時間である。日本人は勤勉であるという代名詞はどこかにいってしまっている。

かつて、本屋にはQCコーナーと称して多くのQCの本が並び、現場にも「QCサークル」誌が配られて、経営者から第一線従業員まで、真剣になってQCを勉強した。石川馨博士は「QCは教育にはじまって教育に終わる」とQC教育の重要性を訴えられた。

QCを再興するためにQC教育を再考していただきたい。

経営者は、「ものづくりは人づくり」と考え、人材育成のための教育投資を怠らない。管理者には、部下に対して、QC教育と学んだ結果を実務に活用させる機会を与えていただくことを期待する。勝ち組の会社はQC教育にも力を入れておられ、従業員が活性化してますます業績も向上するというポジティブフィードバックがかかっているように思われる。

そして、私たちQC関係者が反省しなければならないことは、先人の遺産に頼るのではなく、自らの手で時代にマッチしたQC教育の新しい内容、方法を創出し、普及にあたることである。

QCの考え方、手法は、仕事の質を高める基本である。全員が、仕事を通して学び、人格を磨くという確固たる仕事観のもとにもものづくりに励むことによって日本の活力を回復していきたい。

第291回 事業所見学会 ルポ

(株)コーセー狭山事業所 (本社工場)

第291回事業所見学会は7月29日(火)埼玉県狭山市(株)コーセー狭山事業所(本社工場)で「総合的マネジメントシステムで質経営実践企業に学ぶ」のテーマの基に19名が参加して開催された。

(株)コーセーは、「人と地球にやさしい化粧品作り」のキャッチフレーズの基に優れた品質の追求を実践している企業で、1980年に化粧品業界では初めてデミング賞を受賞し、その後も部門組織の取り組みだけでなく工場働くすべての従業員が自発的な改善活動を実践している会社です。

当日は、執行役員で生産物流本部長の高橋様、工場長の利根川様以下工場幹部の方々が率先してご出席戴いての、会社概要説明・TQM活動の実際・コーセー独自の活動である「TPI活動」(Total Productive

Innovation ; 生産改革)・QSK(品質マネジメントシステム)及び、工程管理の4M(4M=設備、方法、作業者、原材料)と品質保証項目について推進の経緯と実態の説明を受けた。また、工場見学では実地での説明を丁寧に戴いた。工場内では、整然とレイアウトされたラインにおいて、随所で、TPI活動の基本の製品品質保証項目(安全性、安定性、美容性、利用性)の実践に向けた生き生きとした現場を見学することが出来た。

見学会のもう一つの目的であるコーセーのQCサークル活動については担当課長の須藤様が詳細に特徴有るATM活動(1994年より導入された小集団活動の名称)の現状を説明戴き、高いレベルの現状に接することが出来たのは参加者一同感激であった。質疑応答では予定終了間際まで活発な討議が行われ、活力有る企業の実態に接することが出来大変有意義な見学会となった。

池田晃三(竹中工務店)

第292回 事業所見学会 ルポ

アサヒビール(株) 名古屋工場

さる7月25日(金)に第292回事業所見学会(中部支部70回)が、名古屋市守山区のアサヒビール名古屋工場にて「ビールの製造工程における鮮度管理と環境保全活動について」をテーマに、28名の方々が参加して行われた。

アサヒビール名古屋工場は1973年操業で、現在はビール大瓶換算で年間約5.7億本を生産している。また、オゾン層破壊防止と地球温暖化防止のために設備の「完全ノンフロン化」を、日本のビールメーカーではじめて実現した工場でもある。

各製造工程を見学させていただくと、最先端技術と万全な品質管理により、すべてが「うまい!」につながる品質管理体制が確立されていることが伝わってくる。特に、複数の巨大なタンク内の温度・酵母を均一にコント

ロールし、銘柄ごとに異なる、微妙な官能である「味」をいかに特徴づけていくか、関心が高まるところである。

環境対応では、ノンフロン化のほか、生産ラインから排出される副産物・廃棄物はすべて再利用され、最も発生量の多いモルトフィードは飼料として再資源化されている。いたるところで先進的な取り組みが注目を集めた。

質疑応答では、製造工程から品質管理、官能評価、新商品開発の話まで多岐にわたり、試飲と並行して始終和やかな雰囲気の中、熱のこもったものとなった。あらためて、ビールという身近で親しみのある商品に対する、関心の高さに驚くところである。

本格的な夏到来にもかかわらず天候不順・低温が続く中、当日は久しぶりに天候にも恵まれ気温も上昇し、ビール工場を視察するには絶好の日和となった。

参加者一同、アサヒビール様のチャレンジ精神に立脚した「品質と提案への挑戦」の現場を見学させていただき、熱い一日を過ごすことができた。

鈴木信滋(株式会社魚国総本社)

第11回 YSS ルポ

サンデン・コミュニケーションプラザ

去る8月22日から23日にかけて、第11回ヤング・サマー・セミナーがサンデン(株)のご厚意により同社コミュニケーションプラザにおいて開催された。

参加者は原則として35才以下の正会員・準会員で構成され、今年は企業から2名、学生40名、大学教員2名の計44名が参加し、2日にわたって講演と研究発表・討論が行われた。

初日は、大学の先生、企業の方に革新的な商品企画を実現するための理論とその応用事例についてご講演を頂くと共に、21世紀を担うべく若者に対する熱いメッセージを頂いた。まず「商品企画七つ道具・その理論と実践の狭間で ヒット率100%の商品企画システムを目指して」という演題で成城大学の神田範明先生に行って頂いた。次に「パイオニアの商品企画プロセス～感動共創～P7の活かし方」という演題でパイオニア(株)の町田卓也氏に、そして最後に「産業機器メーカーに於ける企画・デザイン活動」という演題でサンデン(株)の大島義典氏にご講演を頂いた。参加者は

各氏からの熱の入った講演に聞き入り、大学の研究活動と社会の結びつきの重要性を再認識した。

夜には懇親会が行われた。参加者の親睦を深めるとともに、講演に関する質疑、議論がなされ、非常に充実したひと時となった。

翌日は、5人の学生による研究発表が行われた。まず「ウェイトを考慮した品質モデルの定量化に関する研究」という題目で明治大学の久保輝史君が、次に「苦情対応を目的とした不具合知識の運用」という題目で東京理科大学の田中政孝君、「クリニカルパスとは」という題目で東京大学の塩飽哲生君、「サービス・プロセスとBSC」という題目で電気通信大学の下中大輔君、そして最後に「統計的多重比較法におけるチューキーの方法に関わる諸問題に関する研究」という題目で早稲田大学の松葉且祥君が発表を行った。それぞれ限られた時間の中で様々な視点から非常に活発な質疑応答が行われた。

本セミナーは今後の品質管理界を担う次代の若手の研鑽、親睦に大きな役割を果たすものである。次回以降も多くの企業や学術機関の若手の参加を期待したい。

平岡佳恵(東京大学)

新規研究会メンバー募集のご案内

新規研究会の設置が決まりましたので、メンバー（会員）を募集いたします。

1. リフレクター研究会

知（の種子）の誕生は“ヒラメキ”や“気づき”という言葉で表現されます。知の種子の誕生には個人と、その人が属する“組織と構成メンバー”の努力が重要です。“知の宇宙”を探索するために“組織”を反射型天体望遠鏡のフレームに、“構成メンバー”をそこに据え付けられた複数のリフレクター（反射鏡）に例えてみました。リフレクターがどのように影響し合い、知の種子の創造を効果的・効率的に行うことができるか、ということの研究の主たる狙いにしました。多くの場で研究・実施されている“小集団活動”を、知識創造の場としての研究の中心に位置づけました。小集団活動に関心をお持ちの方、認知科学・言語表現・行動科学など、知識創造に関連する分野に関心をお持ちの方、また経験を積まれた方、柔軟な新しい発想に富んだ若い方の参加を歓迎いたします。

主 査：布施輝雄（富士ゼロックス㈱ 社友）

開催日：第1回・平成15年10月28日（火曜日）18時～20時

2. デジタルエンジニアリングと品質保証研究会

様々な業界でデジタルエンジニアリングは用いられている。これらの業界での商品における現実の問題を把握し、具体的に分析し、問題の構造を解明し、業界固有問題、共通問題を明らかにし、業界別課題と学会共通課題を明らかにする。さらにそれらの課題について固有技術と管理技術を統合しさらに技術指導をも含めた品質保証技術の研究を行う。顧客使用環境定義、設計、検証、技術指導、管理等の課題が予想されます。研究会は月1回開催予定です。積極的なご参加をお待ちしています。

主 査：金子龍三（日本電気通信システム㈱ 執行役員）

開催日：第1回・平成15年10月16日（木曜日）18時～20時

申し込み方法：本部事務局宛に会員番号・氏名・所属・連絡先を明記の上、FAXまたはE-Mail（Office@jsqc.org）にてお申し込みください。

定 員：各20名

2003年8月の
入会者紹介

2003年8月の資格審査において、下記のとおり正会員3名準会員1名の入会が承認されました。

（正会員3名） 鎌田 浩（NOK）
間島 政紀（日本科学技術研修所）
木内 一秀（NTTエレクトロニクス）

（準会員1名） 藁科 えりか（早稲田大学）

正 会 員：3208名

準 会 員：124名

賛助会員：191社217口

公共会員：22口

第33年度会費請求のお知らせ

第33年度（2003年10月1日～2004年9月30日）会費請求書を同封いたします。

郵便局自動引き落としを利用されている方には請求書を送付いたしておりません。10月25日に引き落としとなりますので、郵便口座の残高をご確認ください。

行 事 案 内

第33回年次大会・名古屋工業大学（名古屋）

日 時：2003年11月7日（金）8日（土）
7日（金）

13：45～17：00 事業所見学会
（㈱デンソー／豊田工機㈱）

17：45～19：45 懇親会
会場：デンソー社員クラブ

8日（土）通常総会／講演会／研究発表会

9：30～10：30 通常総会

10：30～10：55 各賞授与式

11：00～11：45 新会長講演
飯塚悦功氏（東京大学教授）

12：45～17：35 研究発表会

参加費：

見学会（7日）

会 員2,500円 非会員3,500円

準会員1,500円 学生一般2,000円

懇親会（7日）

会 員・非会員4,000円 学生2,000円

講演会／研究発表会（8日）

会 員5,000円 非会員7,000円

準会員2,500円 学生一般3,500円

申込方法：ホームページから申し込みできます。

http://www.jsqc.org/ja/oshirase/gyouji

申込締切：2003年10月27日（月）

ISO9001:2000審査員のためのTQM
基礎講座（本部）

- 毎月1回5回開催・会員優先 -

参加費：会 員：3,000円

（5回連続申し込み：12,000円）

準会員：2,000円

（5回連続申し込み：6,000円）

非会員：6,000円

定 員：毎回先着100名

時 間：毎回18：30～20：30

会 場：日本科学技術連盟
東高円寺ビル地下1階講堂

プログラム：

第1回 12月18日（木）

TQMのフレームワークと基本原則
中條 武志氏（中央大学）

第2回 1月

方針管理と改善活動

村川 賢司氏（前田建設工業）

第3回 2月

日常管理と標準化、品質保証

棟近 雅彦氏（早稲田大学）

第4回 3月

TQMのための手法 - SQCとその活用 -

山田 秀氏（東京理科大学）

第5回 4月

新JISと標準化をめぐる最近の動向

矢野 友三郎氏（経済産業省）

申込締切：2003年12月11日（木）

行 事 申 込 先

本 部：E-mail：apply@jsqc.org

中部支部：E-mail：nagoya51@jsa.or.jp

関西支部：E-mail：kansai@jsqc.org